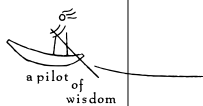


建築というきっかけ

永山祐子

Nagayama Yuko



目 次

第一章 物語をつくる

物語の中に生きている

スイスの幼少期

母と祖母

阿佐ヶ谷の家

中央線沿いの子ども時代

中央線とスイスアルプス

ミクロへの好奇心

冬眠時代

『パワーズ オブ テン』

建築を志した日

【コラムⅠ…永山國昭】

第二章 建築の道を進む

進路変更

冬眠から目覚めて

日仏青年会議

アブダビへの旅

設計課題

アートキャンプ白州

「やらないこと探し」

卒業設計「日暮里駅」

シーラカンスにて

青木事務所へ

机の下に住む？

【コラムⅡ…杉浦久子】

第三章 来た波をつかむ

独立

解散危機

ルイ・ヴィトン大丸京都店

伝え方を編み出す

偏光板ファサードが実現するまで

山あり谷あり、壁あり

想定外のトラブル

建築家の「さが」

【コラムⅢ…丸恭子】

第四章 課題を乗り越える

アンテプリマとの出会い

商業建築との出会い

人との出会いから

カヤバ珈琲の再編集

リノベーションと物語

「売る」立場になってみる

豊島横尾館

母の一言

出産前後の変化

生と死、真っ赤なガラス

【コラムⅣ・・萩野いづみ】

第五章 建築を信じる

仕事と育児

立場を越えて

現場で人とつながる

不安はブラックボックスに

建築という「趣味」

ドバイ万博日本館

白銀比、水、麻の葉、アラベスク

大阪・関西万博「ウーマンズパビリオン」

仲間が増えていく

パナソニックグループパビリオン

スケッチを形にする

「自分ごと」として

【コラムV..宮地 純】

第六章 未来を思い描く

東急歌舞伎町タワー

「水」を表現した超高層

制約から生まれるアイデア

都市景観を考える

JINS PARK 前橋

地域共生の場

商業建築の公共性

松坂屋名古屋店

言葉は乗り物

物語は続く

【コラムVI..田中 仁】

おわりに

構成／清野由美

章扉作成／MOTHER

はじめに

二十六歳。私は建築家として独立しました。

青木淳さんの設計事務所に入所の面接をしていただいた時に、「うちは四年制です」と告げられました。「そうか、もし入所したとしても私は四年後ここを出ていかなければならないんだ」と、四年間は集中して、青木さんに任せていただいた二件の住宅と美術館の実施設計に没頭しました。そしてその言葉通り、入所から四年後、青木事務所を退所し、独立しました。当時の私は、建築で本当に食べていけるのか、自信はまったくありませんでした。師匠である青木淳さんをはじめ、素晴らしい建築家の方々のお仕事を見て、私もその一隅で建築に関わっていったらうれしいと、ただ、それだけの気持ちでした。

昔から私は、自らの将来設計を綿密に立てる方ではありません。私の場合、それらを決めてしまうと達成そのものが目的になったり、達成できなかった時に落胆してモチベーシ

ヨンが下がってしまったります。それよりも目の前にある仕事に、百パーセント以上の力で応えていく。そうすると、少しだけ前に進める。一步、階段を上がると、少しだけ遠くが見える。その繰り返しの中で、世間知らずだった私でも、世の中が少しだけ分かるようになってきました。そうして自分が何をすべきかが見えてきた気がします。

建築は私にとって、自分の進むべき道を示してくれる先生のような存在です。

近年は新宿の「東急歌舞伎町タワー」(二〇二三年)や、「ドバイ万博日本館」(二二二年)、そして大阪・関西万博(二五年)の「パナソニックグループパビリオン『ノモの国』」「ウーマンズパビリオン in collaboration with Cartier」と、大都市のシンボルビルや、国際的なプロジェクトにも関わるようになってきましたが、初心とまったく変わらず、目の前にある仕事に向き合っています。

建築家は公共的な役割を担う職業ですので、社会から自分がどう評価されるかについては、最終的には気になりつつも、自分を突き動かしているものは、そことはまた違うところにある気がします。それまでに見たことのない景色を自分が見たいから、建築をやって

いる。それを一生、楽しみながら続けたい。私にとっては、それが原動力です。

日本は戦後、丹下健三さん^{たんげ}から始まって、世界に名だたるスター建築家を数多く輩出してきました。建築界のノーベル賞と言われるプリツカー賞の受賞者も世界最多です。

建築と建築家を取り巻く状況は、私が独立した二〇〇二年ごろとは、大きく変化しています。超高層ビルが建つ大型開発は、建築の創造性よりも投資リターンが最優先に追求されることも少なくなき、万博のような国家プロジェクトでは、どの時代にも賛否両論が激しくぶつかり合います。

すばらしい可能性の萌芽^{ほうが}があっても、ほんの少しのリスクを理由に、実現に向けて進めていくことが難しいケースもあります。建築家もまた、かつてほどのチャレンジがしにくい状況にあります。それでも私は諦めず、前に進むためにアクセルを踏んでいきたい。難しい状況があるなら、それを傍観せず、自分が渦中に入って前に進めていこうと考えます。なぜなら、私は建築の力を信じているからです。

建築をきっかけにして、そこに人が訪れる。人が人を呼んで、その場所が元気になる。そうやって、人と場所が幸せになっていく。建築はその場所の潜在的な可能性を引き出し、

未来に向けてその可能性を広げていく役割を持っています。建築の仕事を通して、私はそのような場面をたくさん見てきました。だからこそ、私の講演会では、そのタイトルを本書の題名でもある「建築というきっかけ」としてきました。

建築家の仕事は、世間と時間軸が何歩かズレていると感じます。建物が目の前に現れ、多くの人に認識されるずいぶん前に、私たちの設計の山場は終わっていることがほとんどだからです。

たとえば大阪・関西万博のウーマンズ パビリオンは、前万博であるドバイ万博の日本館の部材のリユースがあつたので、前万博が終わる前にすでに肅々と準備が進められていました。パナソニックグループパビリオンは、二〇二五年四月開幕の八ヶ月前にあたる二四年の夏には建築工事が終わっていました。設計を進めている中では世間の厳しい声も聞こえてきましたが、とにかく適進まいしんしました。

建築は構想から設計、施工を経て完成するのに数年、時には十年を超える月日がかかります。そして、完成したら何十年もそこにあり続けるという、とても長いスパンの仕事で

す。それに対して、世の風潮、空気感はとてつもないスピードで目まぐるしく変化します。ブームも批判も一ヶ月後には様相が変わっていて、半年も経^たったら忘却の彼方^{かなた}に消えていく。建築とはスパンが違うので、そこに惑わされると本質から離れてしまいます。

独立直後の手探りの日々から二十年以上の月日が経ち、今まで多くのスタッフと一緒にさまざまなプロジェクトを進めてきました。その中で、人を育てるということにも意識を向けるようになりました。

建築という仕事は、外形のデザインだけでなく、その時の社会、経済、政治の状況や、国や地域が積み重ねた文化、芸術など、あらゆることを総合的に考え、解決していくものです。多角的に物事をとらえ、包括的に考えていく必要のある建築家の職能は、複雑な要素が絡み合い、一筋縄ではいかなない世の流れの中で、新しい視点を見つけ出す可能性を持っています。私が独立し、仕事を得ていたタイミングでは、若い建築家が建築だけではなくインテリアや外装など、それまであまり建築家が関わってこなかった商業分野などにもチャンスを得て、活躍していくケースも多くなりました。今は、建築設計という枠を超え

て、もっとその視点を活かせる場面が増えてきているし、これからの時代は、その幅がさらに広がっていくと思います。

私たちの周囲を見回せば、そこにたくさんの建築が建っています。その建築は誰かによって構想され、生み出されたものです。うちの子どもたちは幼いころから私の設計した建築を見ているので、建築を見ると「これ誰がつくったの?」とたずねてきます。私たちは普段当たり前に接しているものが、誰かの思いによってそこに存在していることを忘れてしまいがちですが、その一つの実例として、本書を通してものづくりの裏側、喜びを共有し、自分たちを取り巻く世界を見る時に、「見方が変わったよ」と言っていただけならうれしいです。

(書き手…清野由美)